

2026 年度

一般選抜入学試験 問題集

国 語



共 栄 大 学

教育学部 / 国際経営学部

I 次の文章を読み、設問に答えよ。

一

白い帽子。白いワンピース。白い靴。金色の鎖のついたピースのハンドバッグ。赤い胴の水筒。片腕で抱くのちよいどいい大きさの赤毛の人形。それから、網袋にぎっしり詰まったキャンデーも。「これでお仕舞い。」

と父親はいって、空になったボストンバッグのチャックを閉じた。

チサは、目の前に並べられた品々にただ黙って目を瞠っていた。保育園に迎えにきてくれたときから、ふくらんだボストンバッグをなにか怪しいと睨んでいたのだが、まさかこんなものが入っているとは思わなかった。チサは、保育園祭のとき、鬚のおじさんがシルクハットのなかから鳩を取り出してみせたことを思い出した。自分の父親に、手品ができるとは思わなかった。

「どうだ？ まだほかに欲しいものがあるか？」

そういわれても、チサにはなんのことかわからなかった。病身で、女のように色白な父親の頬に、珍しく赤みがさしていた。

「……ほかにって？」

「このほかにだよ。」と父親は、目の前の品々へ顎を振っていた。「お帽子に、洋服に、靴もある。それに、ハンドバッグ、水筒、お人形、キャンデー。これはみんなチサのものだよ。」

チサはびつくりした。

「あたしにくれるの？ 全部？」

「そうだよ。」

「……誰が？」

「勿論、父ちゃんだよ。チサが欲しがってたものをちゃんと憶えてたから、きょう昼休みに白山通りへいって、片っ端から買ってきたんだ。」

白山通りというのは、町で一番賑やかな商店街で、父親が勤めている町役場から歩いてすぐのところにある。

チサは、ピースのハンドバッグと手頃な人形は確かに欲しいと思っていた。近頃はいちども口にしたことがないが、母親がまだ生きていたころはよくおねだりをしたものであった。父親はそれを聞き憶えていたのだろう。赤い胴の水筒も、もしかしたら保育園の仲間が持っているのを見て、あんなのが欲しいといったことがあったかもしれない。

けれども、白い帽子や、白い洋服や、白い靴については、なんの記憶もなかった。そんなものをねだったことは勿論、欲しいと思った憶えすらなかった。チサは、最初から、そんな絵や写真に出

-1-

てくる都会の子が身に着けているようなものは、自分にはまるきり縁がないのだと諦めていたのだ。ところが、到底手が届くものではないと思っていた白い帽子と白い洋服と白い靴とが、いま目の前にある。しかも、それが全部自分のものになるのだという。チサは、あまりにも幸運な自分をちよつと痛めつけたいではいられなくなって、両手をいきなり頭に上げると、指に触れてきた髪の毛を握るだけ握ってきりきりと左右に引っ張った。

「どうしたんだ？ 嬉しくないのか？」

父親が顔を曇らせていった。急いであぶりを振ると、握ったままの髪からリボンが一つ抜けてきた。

「だったら、髪をきちんとして。そんな頭じゃ、このお帽子は似合わないよ。」

「いま被るの？」

「被ってみるさ、大きさが合うかどうか。」

帽子も靴も、すこし大き目だったが、我慢できないほどではなかった。父親に手伝って貰ってワンピースに着替えてみると、これは詠えたようにびつたりであった。父親は、ほっとしたように、うしろ手を突いて眺めた。

「可愛いよ。よく似合う。」

大きな鏡があればよかったのに、とチサは思った。家には鏡台も姿見もない。女気がないからそうなのではなくて、母親が生きていたころから鏡台も姿見もなかった。チサは、母親が鏡に向って化粧をしているところなどみたことがなかった。母親は、年中病院通いをしていて勤めも休みがちな父親の代わりに、なりふり構わず働いていたのだ。

「外へ出ちゃいけない？」

「これから？ 外はもう暗いよ。それに、汚すといけないから。」

チサは、帽子もワンピースも靴も、脱ぐのが惜しくなっていた。

「今度は、いつ着るの？」

「あさって。」

「あさって、これ着て、どこへいくの？」

「母ちゃんとこへだよ。」

「……お星さまへ？」

と、チサは目をまるくしていった。日頃、死んだ母親は星にいて自分たちを見守っているのだと、父親にそっくり聞かされていたからである。

父親は、目をしばたたくと、急にうつむいて靴下を脱ぎはじめた。

「お星さまへ、いききたいか？」

「……また戻ってこれる？」

-2-

と、すこし考えてからチサはいった。

父親は、なにもいわずにネクタイを弛めると、部屋の隅へ立っていった。チサに背中を向けたまま着替えをしながら、

「お墓参りにいくんだよ、母ちゃんの。あさっては命日だろう?」

それでわかった。おめかしをして、随分大人になったところを母親にみせにいくのだ。

「このハンドバッグも持って?」

「そう。」

「それから……。」

とチサはいいかけて、口を噤んだ。墓参りに、人形や水筒が要るものだろうか。そう思っていると、父親の方から、

「人形や水筒やキャンデーはな」といった。「墓参りを済ませたら矢ノ浦へ連れてってやるから、そのとき持つていくといい。」

チサは、素足に大きな靴を履いていることも忘れて、あやうく飛び上るところだった。矢ノ浦というのは、町から汽車で二時間ほどの城跡のある市で、市内には動物園や遊園地もあるし、海にも近い。チサは、保育園の仲間たちが自慢そうに矢ノ浦での見聞を話すのを聞いて、自分もいちどはそこへいつてみたいものだと思っていたのだ。

「さあ、そろそろ脱がなくなつちゃ。」と、父親がどてらの帯を締めながらいった。「父ちゃん、顔を洗ってくるから、そしたら大事に畳んで箆筒に仕舞って、飯にしような。」

ひとりになると、チサは ア ビーズのハンドバッグを手にとって、それを胸に押し当ててみた。すると、空だとはかき思っていたバッグの底で、なにやら指先に固く触れてくるものがあった。口金を開けて、覗いてみると、^a不思議なものが入っていた。何十とも知れない小粒なガラス玉を、紫色の太い糸で綺麗に繋いで、輪にしたものが入っていた。輪の結び目のところが可愛らしい房になっている。

チサには、それがなんなのかわからなかった。腕輪にしては大きすぎるし、首飾りにしてはとも頭が通らない。すると、こうしてバッグの底にそつと沈めて置くものだろうか、お守りみたいに――台所から洗面器の水を流しへこぼす音がきこえてきたので、チサは、急いでそのガラス玉の輪をバッグに戻して、口金を閉じた。

二

※ 省略 ― 寺の本堂でのお経の場面 ―

随分念入りなお経で、ゆうべ遅くまで寝付かれなかったチサは、堪え切れずに大きなあくびを二つした。ゆうべは、どうしたことか胸の太鼓がいつまでも鳴りやまなくて、困った。ようやくそれ

— 3 —

にも聞き馴れて、うとうとすると、今度は父親が便箋を一枚ずつぱりぱりと剥ぎ取る音で、何度も目を醒ました。父親は、家のなかをきちんと片付けてチサを寝かせてしまうと、飯台にとてらの背中をまるくして手紙を書きはじめ、一体何人に書くつもりなのか、ぱりぱりと便箋を剥ぎ取る音がいつまでもやまなかった。時々、くしゅん、くしゅん、と鼻を鳴らすので、チサは、鼻風邪ではないかしらん、また熱でも出たら明日の矢ノ浦行きはどうなるのだろうと、そんなことを気にしているうちに、いつしか深く眠ったが、今朝になってみると、有難いことに、父親は持病で白くむくんでいるだけで鼻はなんともなくなっていた。

お経が済んで、本堂から墓地へ移るとき、住職が歩きながらチサの頭に手を置いて、「大きくなつたね。この二年の間に随分大人になった。」といった。それから、父親に、「近頃、腎臓の方はどうです?」と訊いた。「はあ、それが、相変らずでして……どうもはかばかしくありません。」と父親は答えた。「腎臓は長くかかりますからねえ。気長に、辛抱強く養生するしかありませんな。」と住職はいったが、母親の死後、父親は疎に病院通いも勤めを休むこともできなくなっている。「それにしても、大変ですなあ、ひとりで父親と母親の役をするのは。」と、すこし間を置いてから住職はいつて、つづけてなにかいたげにみえたが、結局なにもいわずに、またチサの頭に手を置いた。父親も、それきり口を噤んでいた。

住職が先に墓を離れてからも、父親は、尻の先が若に触れそうなど深くしゃがんで、長いこと拝んだ。チサは、痺れがきれそうと、途中でいちど立ち上ってから、またしゃがみ直した。父親は、いつものように、なにかぶつと聞き取れない呟きを洩らしながら拝んでいたが、チサは、また父親はおなじ詫言を繰り返している、と思いつながらその呟きを聞いていた。母親は、ちょうど二年前の雨降りの晩に、働きに出ていた製麺工場からバイクで帰ってくる途中、橋のたもとで大型トラックを避けようとしてハンドルを切りそこね、下の河原へさかさまに落ちて頭の骨を折って死んだのだが、父親はそれを自分のせいにして、母親を拝みながら時々、「おまえ、勘弁してくれや。俺が悪かったよう。」と、はつきり聞き取れる声で詫びるのである。

ところが、今朝は、長い呟きのあとで、

「母ちゃんよ、俺、もう、くたびれちまった。」

独り言のようにそういうと、不意に合掌していた両手を膝の間にだらりと垂れてしまったので、チサはびつくりした。

それは、困る。これから水筒を提げて矢ノ浦まで足を伸ばそうというときに、もうくたびれてしまったのでは困る。

「もういこうよ、父ちゃん、矢ノ浦へ。」

と、チサは父親の肩を揺さぶっていた。

— 4 —

「そうだな。じゃ、いこうか。」

父親は、両手でつりと顔を撫で下ろすと、くたびれている割にはさっさと立ち上った。

汽車で矢ノ浦市に着いたのは、昼すこし前であった。さいわい、いい天気恵まれて、晩春にしては日射しが暑いほどだったが、それでもまだ白いものを着るには早すぎて、白ずくめのチサは人目を引いた。駅前の食堂に入ると、サンドイッチを運んできたウェイトレスが、「あら綺麗。ウェディングドレスみたいね。」といった。チサは上気して、赤い顔になっていた。

まず城跡をみてから、動物園や遊園地のある公園に廻り、それから海をみにいくことにして、広場でバスを待つていたとき、チサは、

「父ちゃん、忘れもの。」

といって、そばのポストを指さしてみせた。

さつき食堂で、荷物になる水筒や人形を父親のしなびたポストンバッグに預けると、その底の方に、ゆうべ書いた手紙らしい真新しい封筒が何通か入っているのがみえたからである。けれども、父親は、

「うん……まだ切手を貼ってないから。」

^d 呟くようにそういったとき、動物園にいる動物の種類を指折り数えはじめた。

その日は、週末でも祭日でもなかったせいか、昼さがりの動物園は閑散としていて、けものぐいばかりがきつかった。ようやく新芽を吹き出した木立のなかの遊歩道を歩いていくと、両側に点在している大小の檻のなかから、足音を聞きつけた鳥やけものたちが首をもたげて、じつとこちらをみつめている。チサは、そつとうしろを振り向いて、動物をみにきた自分たちが逆になど勢の動物たちにみつめられているのに気がついたとき、思わず繋いでいた父親の手を強く握り締めた。

「父ちゃん、こわい。」

「こわくなんかないさ。父ちゃんが一緒だろう？」

父親は、真顔でチサの手を握り返した。

遊園地の方にも、二人のように動めや保育園を休んで遊びにきているらしい親子連れなど見当たらず、停まったままの展望車に蔭が羽根を休めていた。チケット売場の窓口で、乗物は客が何人集まれば動くのかと尋ねると、一人でもあれば動かしそうですという返事であった。

「全部に乗せてやりたいけど、それじゃ動かす方に悪いからな。一つ選んで、そいつに乗るか。どれがいい？」

そう訊かれても、どれもが初めてのチサは目移りがして、一つを選ぶのは難しかったが、結局賑やかな飾りに釣られてメリー・ゴー・ラウンドを選んだ。

「そうだな。女の子にはあれがいい。あれにたっぷり乗せてやろう。」

父親はそういって、メリー・ゴー・ラウンドのチケットばかり七回分も買った。

サーカスのテントに似た形の屋根の下には、色とりどりの豆ランプが点滅していて、床の円板には光る真鍮の棒に背中を縦に貫かれた木馬が全部で十二頭、二列になって輪を描きながら王様の馬車を曳いている。軒下の電話ボックスみたいな小屋のなかには緑色の上つ張りを着た初老の女従業員がいて、父親がいきなり七回分のチケットを出すと、あたりを見廻して怪訝そうな顔をした。

「……七人さん？」

「いや、私ら二人だけ。」と父親がいった。

「最初の一回は私も乗るけど、あとの分はこの子に乗せてやってください。」

チサは、十二頭のうちから着ているものに合わせて白馬を選ばず、父親に抱き上げて貰って跨がった。やがて、頭の上でかすれたオルゴールの音楽が鳴りはじめ、ごとりと円板が動き出した。馬は真鍮の棒ごと、ゆっくり上ったり下ったりする。父親はそばに立つて軀を支えてくれたが、二周もすると簡単に馴れて、父親の手を借りることもなくなった。一回分が呆気なく済んだ。

「よし、今度は父ちゃんも乗ろうかな。」

二回目、父親も隣の真鍮の馬に跨がった。チサの白馬が飛び上れば、父親の真鍮の馬は沈む。真鍮の馬が飛び上れば、白馬は沈む。父親は飛び上るたびに、風を切る音のつもりなのか口を章魚のように尖らせて、「ひょーっ。」というので、チサは笑わずにはいられなかった。チサの笑い声が、人気のないメリー・ゴー・ラウンドのまわりに響いた。

三

海へいくには、いったん街まで戻らなければならなかった。街でバスを降りると、近くのレストランへ入って二階に上った。そのレストランは、驚いたことに壁が鏡になっていて、チサは初めて自分の目で盛装した自分の姿をみる事ができた。帽子を脱ぐと、前髪が汗で額に貼りついていて、随分歩いたので、すっかり腹が空いていた。

なんでも好きなものと父親にいわれて、チサは、オムライスと、フルーツサラダと、チョコレートパフェをとって、別に父親と二人でピッツァというのを一皿とった。父親の方は、食欲がなく、ピッツァを肴に珍しくビールを、みるみる目のまわりを赤くしながら一本だけ飲んだ。

「ほかになにか食べたいものはないか？ 海の空気はお腹が空くよ。」

父親はしきりにそういったが、そんなに食べられるものではない。チサは腹がぐちぐちになって、タキシードのなかでうとうとしたが、浜でひんやりとした潮風に当たると、忽ち眠気が醒めてしまった。浜といっても、矢ノ浦の海岸はほとんどこつこつとした岩浜ばかりで、ところどころに断崖が高く切り立っている。チサは、そこでも父親に手を引かれて、随分歩いた。父親は、めっきり口数がな

くなくて、どこへいくでもなく、なにをみるでもなく、探しものでもしているように時々立ち止まってはあたりを見廻しながら、ただ黙々と歩いていた。

陽が裏山に隠れてしまうと、浜は急に薄暗くなって、風が冷たさを増した。チサは淋しくなって父親に話しかけたが、父親は生返しかしてくれない。それでも、不意に波しぶきを浴びたりして、「父ちゃん、こわい。」というとき、昼に動物園でそうしたように手を強く握り返して、「こわくない。父ちゃんと一緒なら、どんなところへいったってこわくない。」と、叱るように父親はいった。

それにしても、父親にしっかりと抱かれたまま細い坂道を登り詰めて、茨のなかを漕ぐようになった崖縁の方へ近寄ったときは、チサはやっぱりこわくて跳き出しそうになった。

「父ちゃん、こわい。」

「こわくない。父ちゃんも一緒だ。」

「……こわい。」

「こわくない。」

それでもこわくて、のけぞると、暮れ方の空に白く光っている一番星が目に入って、「あ、母ちゃん。」チサは思わずそういった。「母ちゃんが、あそこでみてる。」

父親は、急に立ち止まった。チサは黙って一番星を指さしてみせた。父親は肩で大きな吐息をした。それから、チサは、急に弛んだ父親の腕の輪から抜け落ちて、茨のなかに尻餅をついた。

——その晩、もう帰りの汽車には間に合わなくて、仕方なく泊ることになった浜の旅館で、チサは、おかしな夢を見た。仄暗い野原のようなどころをひとり歩いていて、昼に遊んだメリー・ゴー・ラウンドの木馬たちが、蹄の音も軽やかにあとを追いかけてくる夢である。

「あら、どうしたの？」

と立ち止まると、十二頭の木馬たちはチサを取り囲むようにぐるりと鼻面を並べて、ゆっくりゆっくり近づいてくる。

「そうか、逃げてきたのね、あんたたち。」

そういっても、木馬たちは黙っている。

「どうして逃げてきたの？ 時々こうして遊びに出るの？ でも、どうやってあの

イ

から外れてきたの？」

つづけさまたでう訊いても、黙っている。黙ったまま、木馬たちはだんだん鼻面の輪を縮めてきて、最初の鼻息が頬に触れたところで、チサは目醒めた。すると、思いがけなく、父親の顔がすぐ目の前にみえた。あ、父ちゃん、というとき、その顔が忽ち遠退いた。起き上ってみると、父親は、浴衣の前をはだけて枕許にあぐらをかいていた。

「……馬は？」

と、チサはあたりを見廻していった。

「馬？」

「ほら、遊園地の。」

「……ああ、メリー・ゴー・ラウンドの木馬か。」

「いまここにいたんだけど。」

「そんなものはいやしないう。夢をみたんだろう。」

けれども、そういう父親のすっかり血の気の失せた顔も、チサには夢に出てきた木馬たちとおなじくらい不思議に思えて、

「父ちゃんは？ なにしたの？」

「俺か。俺は、いま、寝るところだ。」

父親は、そそくさと浴衣の前を掻き合わせながら、ぎこちなくさういって、手に持っていた細い帯を急いで腰に巻きつけて、

「消すよ。」

スタンドのスイッチを切ってから隣の寢床へ這うようにしてもぐり込んだ。それきり、いつまでも寝息がきこえない。遠くで雷が鳴っている、と思ったのは、岩浜に砕ける波の音であった。チサは、すっかり目が冴えてしまった。

「父ちゃん、そっちへいつていい？」

返事がないのは、好きにしろという合図だとチサは思い、這い出していつて、父親の背中の蔭に滑り込んだ。すると、父親の頭えがすぐに伝わってきた。父親の、肩と背中がひどく震えていた。

「父ちゃん、寒いのか？」

今度も返事はなかったが、こんな真夜中に、浴衣の前をはだけて畳の上にあぐらをかいていたからだと、チサは思った。それから、死んだ母親が冬の寒い晩などによくそうしてくれたように、父親の頭える背中に自分の軀の前をびつたりと貼りつけるようにして、チサは目をつむった。

（三浦哲郎『メリー・ゴー・ラウンド』による）

1 空欄 ア に入る最も適当な言葉を、次の1～5のうちより一つ選べ。

1 ききとして

2 軽々と

3 うやうやしく

4 こわごと

5 おすまじして

2

傍線部 a「不思議なもの」を漢字二文字で表した場合、二文字目に用いられる漢字を次の 1～5 のうちより一つ選べ。

- 1 菊 2 環 3 飾 4 珠 5 玉

3

傍線部 b「ゆうべは、どうしたことが胸の太鼓がいつまでも鳴りやまなくて、困った」とあるが、これはどのような様子をあらわしたのか。次の 1～5 のうちより最も適当なものを一つ選べ。

- 1 持病に加え、鼻風邪をひいて熱が出てしまったら、明日の予定はどうなってしまうのだろうと、父の健康状態が心配で寝付けない様子。
 - 2 明日は母の命日で寺に行くことを思うと、立派に振る舞わねばならないと考え込んでしまった不安で寝付けない様子。
 - 3 動物園や遊園地のある公園に行けると思うと、期待やうれしさを感じるものの、いいようのない悲しみがこみ上げてきて寝付けない様子。
 - 4 便箋を剥ぎ取る音がいつまでも続くので、父親はいつか誰に手紙を書いているのだろうと気になり寝付けない様子。
 - 5 新しく買った白い服を着ることや、矢ノ浦に行くことを想像すると、うれしさのあまり寝付けない様子。
- 傍線部 c「チサは父親の肩を揺さぶっていった」とあるが、この時のチサの様子の説明として最も適当なものを、次の 1～5 のうちより一つ選べ。
- 1 素直であどけない子どもらしさを装うことによって、気弱になっている父親を元気づけようとしている。
 - 2 詫言ばかり繰り返す父親にひどく嫌気がさして、不満をぶつけて改心させようとしている。
 - 3 亡くなった母親のことにいつまでも氣をとられている父親が面白くなくて、自分のことにも目を向けさせようとしている。
 - 4 大人びてはいるものの、思い悩んでいる父親をいたわるまでには至らず、楽しみにしていた公園行きを無邪気にせがんでいる。
 - 5 疲れ切ったふりをして公園行きをあきらめさせようとしている父親の意図を見抜き、あくまで自分の願いをおそそうとしている。

5

傍線部 d「眩くようにそういったきり、動物園にいる動物の種類を指折り数えはじめた」とあるが、この時の父親の心情はどのようなものであるか。次の 1～5 のうちより最も適当なものを一つ選べ。

- 1 おざなりの返事をしておいて、かつて親子三人で来たことのある動物園の様子を思い出そうとしている。
 - 2 思いがけない娘の指摘にうろたえ、心づもりを悟られないように話題をかえようとしている。
 - 3 娘の観察力に驚くあまり返事がためられ、また自分のうかつさが恥ずかしく、話題をそろそうとしている。
 - 4 何気ない口調でうまく話題をそらせたいと思い、動物の数を数えるふりをして手紙を出す相手を確認している。
 - 5 自分自身が動物園を楽しみにしていて、娘の言葉をわずらわしく思い、いい加減な返事をして話を切り上げようとしている。
- 傍線部 e「父親は肩で大きな吐息をした」とあるが、この時の父親の心情として解説されたものが以下の文章である。この解説文は適当であるか。適当である場合は 1 を、適当ではない場合は 2 を選べ。

病弱な体で母親代わりをつとめ、幼い娘の世話をするに精神的・肉体的疲労が頂点に達し、心中しようとした。しかし、娘の言葉によって、自分を助けるために働きに出て死んだ妻が見守ってくれていることを思い出し、二度と心中などしないという固い決意をした。

7

空欄 イ には四文字の言葉が入る。入る最も適当な言葉を、二の場面から選べ。ただし、その三文字目を次の 1～5 のうちより一つ選ぶこと。

- 1 な 2 に 3 ぬ 4 ね 5 の

II 次の文章を読み、設問に答えよ。

I

日本には昔から生け花がある。今では海外でもイケバナという日本語がそのまま通じるが、英語にしてフラワーアレンジメントということもある。しかし、日本の生け花と外国でフラワーアレンジメントと呼ばれるものは、どこが違うのではないかと前から思っていた。そこで、いつだったか、福島光加という草月流の花道家に会ったとき、

「生け花とフラワーアレンジメントはどう違うのですか」と尋ねてみた。

福島は日本在住の多くの外国人に生け花を教えているだけでなく、しばしば外国に出かけて指導もしている人なので、きつとこういうことに詳しいだろうと思っただけだ。すると、たちどころに、

「フラワーアレンジメントは花によって空間を埋めようとするのですが、生け花は花によって空間を生かそうとするのです」という明快な答えが返ってきた。

そのとき、この答えは生け花とフラワーアレンジメントの違いをいっているだけでなく、

ア

の違いいにも触れているのではないかと思っただけを今でも覚えている。

福島は「花のライブ」というショーを開くことがあって、二、三人の弟子もステージに上がって生けることがある。それを見ていて師匠と弟子はこうも違うものかと思っただけだ。というのは、師匠の福島の生ける花はどれも堂々として大きく見えるのに、弟子が生けた花は、たしかに上手にちがいないのだが、どこか小ぢんまりしてしまう。なぜ師匠と弟子でこんな違いが出てしまうのか。それはひとえに花というものの持つ偶然的要素をかけがえのないものとしてとれただけ生かしているかどうかにかかっている。

一口に松、一口に桜といつても一枝ごとに枝ぶりや花や葉のつき方、色合いがみな違っていて同じものなどひとつもない。もちろん本番の前に花材を調べたり、リハサルをしたりするのだから、ステージに上がって実際、その花を目の前を見ると、リハサルでは気づかなかったところが急に覚えてきたり、あるいは同じ枝かと思うほどまったく違うものに見えることもあるにちがいない。弟子はステージの上でこの変幻する花を手にしたとき、もちろん緊張もあるだろうし、師匠から教わったいろいろの約束事に縛られることもあるだろうが、そのため花のそのときの姿が見えない。弟子が自分では見えていると思っている花はリハサルのときに見た花であって、もはやそこにある花ではない。そうすると、目の前にある花の姿がほんとうは見えていないわけだから、花を生かそうとしても生かすことなどできないわけだ。その結果、生けられた花はどこかこぢんまり型にはめられているような窮屈な感じがし、小ぢんまりしたものになってしまう。

一方、福島の生け方を眺めていると、片時もとどまらない雲や水のように刻々と変幻する花をど

- 11 -

う生かすか、どこをどう切り、どこにどう生ければ、その花がもっとも生きるかということだけを考えている。百人を超す観衆の目の前で自分の手にある一本の枝、一輪の花の今の姿を瞬時に捉え見極めると、その花の姿に応じてまさに臨機応変に鉄を入れ、生けてゆく。生け花の難しい約束事などとは眼中になく、すべてを忘れて花のそのときの姿を生かすことに夢中になっている。

ときには背丈より高い松や桜の枝を手にし、見上げ、まるで自分のいちばん好きな姿になりなさいと呼びかけるかのように揺らし、枝を広げてやる。ライブは高層ビルの林立する東京の真ん中で開かれているのだが、その松の枝のあった空や桜の花を吹いていた風を感じているようでもある。まるで童女が広々とした野山で花と遊んでいるような自由自在であって観客の目にはそれがすがすがしいものに映る。

こうして生けられた花は枝の一本一本、花の一輪一輪がみなそのびのびとしているばかりではなく、花の生けられた空間、東京のとあるホールの無機質な空間が、どこからか風が通い、命を宿したかのようにいきいきと輝きはじめるのだ。

II

日本語の間という言葉にはいくつかの意味がある。まずひとつは空間的な間である。「すき間」「間取り」というときの間であるが、基本的には物と物のあいだの何もない空間のことだ。絵画で何も描かれていない部分のことを余白というが、これも空間的な間である。

日本の家は本来、床と柱とそれをおおう屋根でできていて、壁というものがない。これは部屋を細かく区分けし、壁で仕切り、そのうえ、鍵のかかる扉で密閉してしまう西洋の家とは異なる。西洋の個人主義はこのような個室で組み立てられた家に住んできたからこそ生まれたというのはよくわかる話である。

それでは、壁や扉で仕切る代わりに日本の家はどうするかというと、障子や襖や戸を立てる。「源氏物語絵巻」などに描かれた王朝時代の宮廷や貴族たちの屋敷を見ると、その室内は板戸や部戸、襖や几帳などさまざまな間仕切りの建具で仕切られているものの、いたるところすき間だらけである。西洋の重厚な石や煉瓦や木の壁に比べると、何という

イ

だろうか。

しかも、このような建具はすべて季節のめぐりとともに入れたりはずしたりできる。冬になれば寒さを防ぐために立て、夏になれば涼を得るためにとりはずす。それだけでなく、住人の必要に応じて、ふだんは座敷、次の間、居間と分けて使っていても、いざ、大勢の客を迎えて祝宴を開くという段になると、すべてをつないで大広間にすることもできる。このように日本人は昔から自分たちの家の中の空間を自由自在につないだり切ったりして暮らしてきた。

次に時間的な間がある。「間がある」「間を置く」というように、こちらは何もない時間のこと

- 12 -

ある。芝居や音楽では声や音のしない沈黙の時間を聞という。

バッハにしてもモーツァルトにしても西洋のクラシック音楽は次から次に生まれては消えてゆくさまざまな音によって埋め尽くされている。たとえば、モーツァルトの「交響曲二十五番」などを聞いていると、息を継ぐ暇もなく、ときには息苦しい。モーツァルトは沈黙を恐れ、音楽家である以上、一瞬たりとも音のない時間を許すまいとする衝動に駆られているかのように思える。

それにひきかえ、日本古来の音曲は琴であれ笛であれ鼓であれ、音の絶え間というものがないところにあつて長閑なものだ。その音の絶え間では松林を吹く風の音がふとよぎることもあれば、谷川のせせらぎが聞こえてくることもあるだろう。ときには、この絶え間があまりにも長すぎて、一曲終わってしまったかと思っていると、やおら次の節がはじまるということも珍しくない。そんなふうに、いくつもの絶え間に断ち切られていても日本の音曲は成り立ってしまう。

空間的、時間的な間のほかにも、人やものこととのあいだにとる心理的な間というものもある。誰でも自分以外のひとのあいだに、たとえ相手が夫婦や家族や友人であつても長短さまざまな心理的な距離、間をとって暮らしている。このような心理的な間があつてはじめて日々の暮らしを円滑に運ぶことができる。

こうして日本人は生活や文化のあらゆる分野で間を使いこなしながら暮らしている。それを上手に使えば「間に合う」「間がいい」ということになり、逆に使い方を誤れば「間違ひ」、間に締まりがなければ「間延び」、間を読めなければ「間抜け」になってしまう。間の使い方はこの国のもつとも基本的な掟であつて、日本文化はまさに間の文化ということができよう。

では、この間は日本人の生活や文化の中でどのような働きをしているのだろうか。そのもつとも重要な働きは異質なものの同士の対立をやわらげ、調和させ、共存させること、つまり、和を実現させることである。早い話、互いに意見の異なる二人を狭い部屋に押しこめておけば喧嘩になるだろう。しかし、二人のあいだに十分な間をとつてやれば、互いに共存できるはずだ。狭い通路に一度に大勢の人々が殺到すれば、たちまち身動きがとれなくなつてパニックに陥つてしまうが、一人ずつ間遠に通してやれば何の問題も起らない。

和とは異質のものが調和し、共存することだった。この和が誕生するためになくはならない土台が間なのである。和はこの間があつてはじめて成り立つということになる。

(長谷川権『和の思想』による)

- 13 -

8 空欄 ア には、本文Ⅱの内容を踏まえた言葉が入る。次の 1～5 のうちより最も適当なものを一つ選べ。

- 1 空間的な間と時間的な間
- 2 日本の文化と西洋の文化
- 3 日本の間と和
- 4 空間的かつ時間的な間と心理的な間
- 5 日本人の生活と文化

9 傍線部 a 「師匠の福島の花はどれも堂々として大きく見える」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを次の 1～5 のうちより一つ選べ。

- 1 福島のリブショーであるため観客は福島を見に来ている。当然、弟子のものは花の大きさや種類など変えているから。
- 2 目の前にある花のそのときの姿をよく見て、それをどう生かすかということだけに集中して生きているから。
- 3 昔、自分の師匠から教わった生け花の様々な約束事だけを重視し、それを固く守り続けながら生けているから。
- 4 リハサルで考えたことを思い出し、それと変わらないようにということだけを心がけて生けているから。
- 5 普段から自然の中にある松や桜などの枝ぶりや花の姿を見ていて、その記憶だけを頼りに生けているから。

10 傍線部 b 「片時もとどまらない雲や水のように刻々と変幻する花」とあるが、これは花の持つどのような面を見て筆者はこう言っているのか。これを本文Ⅰから五文字で抜き出す場合、三文字目の文字を次の 1～5 のうちより一つ選べ。

- 1 な
 - 2 に
 - 3 ぬ
 - 4 ね
 - 5 の
- 11 空欄 イ に入る表現として最も適当なものを、次の 1～5 のうちより一つ選べ。
- 1 新しさ、めずらしさ
 - 2 大らかさ、伸びやかさ
 - 3 軽やかさ、はかなさ
 - 4 古さ、奥ゆかしさ
 - 5 重厚さ、質素さ

- 14 -

12

傍線部 c「間を使いこなしながら暮らしている」とあるが、次の高校生の心がけのうちこれに近いものはどれか。次の 1～5 のうちより最も適当なものを一つ選べ。

1 友人と繋がっておくためには、ラインなどは小まめにチェックし、書き込みに対しては肯定的なメッセージを直ぐに返すように心がけています。

2 教室の本棚を整理するときには、本の種類や大きさに気をつけながら、すき間なく本を並べるように心がけています。

3 書道で毛筆を使うときには、紙の余白を意識しながら、全体を整えて書くように心がけています。

4 部活動の個別練習計画を立てるときには、毎月初めにその月の細かい計画を立てて、確実にやりとげるように心がけています。

5 家で受験勉強するときには、集中力を持続させるために、長時間であつても休憩をとらずに取り組むように心がけています。

13

本文 I と II の内容に合うものはどれか。次の 1～5 のうちより最も適当なものを一つ選べ。

1 日本語の間という言葉には、何もない空間、何もない時間、人やものごととの間に心理的な距離がないということなど、いくつかの意味がある。

2 日本人は、空間的な間、時間的な間、人やものごととのあいだにとる心理的な間などを生活や文化のあらゆる分野で使いこなしながら暮らしている。

3 家の中の空間を、自由自在につないだり切ったりすることが、日本人のアイデンティティである個人主義を生み出している。

4 空間的な間、時間的な間は日本人だけが使いこなしているが、心理的な間は、個人主義が生まれた西洋の人々の方がよりよく使いこなしている。

5 生け花は、一見すると空間的な間の象徴のように感じるが、よく見てみると師匠と弟子という心理的な間の象徴として位置づけられている。

「大問Ⅲ」は著作権の関係で

ホームページには公開しておりません。

「大問Ⅲ」は著作権の関係で
ホームページには公開しておりません。

「大問Ⅲ」は著作権の関係で
ホームページには公開しておりません。

Ⅳ 次の文章を読み、設問に答えよ。

K いよいよ入試の時期ですね。A 先生はどのような学生が入学してくることを期待しますか。

A やはり、日本語をしっかりと使いこなせる学生に入学してほしいですね。^a日本語を第一言語とする人は、日本語によつてものごとを考えているわけです。日本語がしっかりと使いこなせないということは、しっかりと考えられないということですから、大学についての専門教育にはついてくることが難しくなってしまう。

K 本当にそうですね。その日本語においては、正しさはもちろんですが、豊かさも求められますね。

A 豊かさに関しては、先人の知恵の結晶であることわざや故事成語、慣用句なども常識として知っていることも大切です。表現に深みや厚みができますから。

K すばらしい新人生がきてくれるとよいですね。期待しましょう。

22

会話文中の傍線部 a「日本語を第一言語とする人は、日本語によってものごとを考えているわけです」についての問題である。以下のアパートの住人に関する文章を読んだ上で、二〇二に住んでいる住人を、次の 1～4 より一人選べ。

- 1 E 2 C 3 D 4 F

A から F までの六人は、以下五つの条件のもとでアパートの部屋にそれぞれひとりで住んでいる。このアパートは二階建てで、各階には三部屋（一階右から一〇一・一〇二・一〇三、二階右から二〇一・二〇二・二〇三）ある。

〈五つの条件〉

- ① A は一〇三に住んでいる。
- ② B の部屋番号に「二」は入っていない。
- ③ C と D は同じ階の隣り合う部屋に住んでいる。
- ④ E は B の真上の部屋に住んでいる。
- ⑤ F の上の部屋に住んでいるのは C ではない。

23

会話文中の傍線部 b「ことわざや故事成語、慣用句」についての問題である。故事成語に適切な戒めや忠告の意を表す「頂（ ）の一针」というものがある。括弧に入る漢字は何か。次の 1～5 のうちより一つ選べ。

- 1 点 2 光 3 上 4 絶 5 門

【国語】

I		
問 題	解 答	配 点
1	④	5
2	④	5
3	⑤	5
4	④	5
5	②	5
6	②	5
7	⑤	5

II		
問 題	解 答	配 点
8	②	5
9	②	5
10	⑤	5
11	③	5
12	③	5
13	②	5

III		
問 題	解 答	配 点
著作権の関係で ホームページには 公開しておりません。		4
		4
		4
		4
		4
		2
		2
		2

IV		
問 題	解 答	配 点
22	③	5
23	⑤	4



共栄大学

入試広報課

〒344-0051 埼玉県春日部市内牧 4158

電 話 048-755-2490 (直通)